

賃貸物語（九） 十代妊娠

小さな出来事と言えるのか

小野 友貴枝

(一)

娘の洗濯物を畳んでいるときに、ふと不安が、裕希の頭をかすめた。毎月、月半ば、紗花のショーツが、茶色にくすんでいることが多いのに、染みがなかった。祐希は無意識に洗って畳んでいるが、頭のどこかに娘のショーツを調べる癖がある。

「もうそろそろあってもいいはずだが」と、本能的に思った。

「今月は、もう十八日だ、いつもなら十二、十三日ごろには、紗花のショーツは汚れているはずだ、なぜ、今月はショーツが汚れていないのだろう、なぜだろう」とさらに疑問が広がった。

家族三人、それぞれの洗濯物を整理ダンスにしまいながら、紗花のショーツが汚れていないことへの疑問が晴れぬまま心の隅に潜んだ。

「さて、今日は早く帰るだろうか？このごろ紗花の

帰り時間が何時になるか、本当のところ知っていない」、と反省した。

祐希が教える生徒のピアノレッスンは、何時までだったろう、早く帰れるかな、と彼女は手帳をめくってみた。

午後二時から始め、三人が終わると七時だ。紗花は七時には、まだ帰っていない。彼女と話し合ってみよう。この貸家に、三月から引越してきて、まだ四か月しかたっていない、この期間、夫、牧島章一との別居やら引越すまでのマンションの片付け迄、雑多なことが多くて、娘の様子を見ていなかった。何分、別居と同時に、マンションを出なければならなかったのだから、気が遠くなる作業が多かった。

やっとここに来て、この生活になじめるようになった。これからのんびりしようと思っていただけに、娘の生理の不安感は、ちよつと傷口に塩を塗るような、そんな痛手である。それでなくても章一との別居は厳しい決断であった。今まで子供のことも含めて何ごとでも話し合って決めていたのに、ここで一人で考え決めなければならぬというのは大変なことである。こんなに大変なら、章一を茨城県笠間に

返さなければよかった。

しかし、章一がなぜ、勸奨退職と同時に田舎行きを決行したかという点、祐希には考えられることがあった。この退職のリストに載ったという理由には、章一の行動に問題があったと、内心感じていた。夫は、都心の大学卒でありながら、営業関係のコミュニケーションに、生来のものなのか未熟なところがあつた。事務能力では力量を発揮するが対人関係では、一歩も二歩も遅れていて、いわゆる営業の分野においては、後手後手であつた。年齢がリーダー格になるとその欠陥が、成績に現れて不評をかつていた。

それよりも、紗花の生理の遅れが心配だ、春の運動会の激務のせいであつたと、取れるのか、それとももつと深い意味があるのか、祐希は自問自答していた。自問自答することに耐えられなくて、彼女は、その晩、紗花を待った。

八時過ぎて帰ってきた。学校からではなく、友達と有沢に出てそこで遊んできたという。

「誰と」

「誰でも関係ないでしょう、友達三人と、駅前マツクでおしゃべりよ」

「それだけ」

「当たり前でしょう、でも今日は、外の人には言えないことを相談した、中に何でも知っている友達がいるんだ」

「どんな事」

「なんだっていいでしょう」

かなり感情的に言い返す。今まで母親に遅かつたね、などと言う言葉をかけられたことがない、いつも自由に学校帰りの時間を使っている。友達と新宿まで出て渋谷を流してきても、母親に行動を確かめられたことがない。なんか気になる、なぜ母が自分の行動を訊いたのだろう。

学校から帰っても中学時代と違って母親がいない、と思うと紗花は、急いで帰る必要がないと高を括っていた。

高校のある駅前にはコーヒーショップもない。そこでこのまま下りの電車に乗って、家に着くなんかナンセンスだと思うようになった。いつも行動を共にしてくれる友人ができたので、なおさら心強い。

小田急を一駅上ると、駅の北口、ロータリーにデパートがあり、賑やかな商店街が四方に続く街に寄り道をするようになった。この楽しさは、下りの電

車に乗るよりもずっと楽しい。

駅前にあるマクドナルドに入って、二時間おしゃべりして帰ると、家に八時に着けるので。毎日、この道草を楽しんでいる。

「食事は」と祐希は、無意識に聞いた。

「食べる。でも風呂先にする」

紗花が、風呂に入っている間に、キッチンを片づけようとしたが、手につかない。これから大事な質問をしようとしている母親の様子になんか不穏なものを感じたのか当の本人は、風呂先だと言って、食事の準備を母親に預けている。これなら、問題はないかも shouldn't、きつと運動会の激務で生理が遅れたのだろう、紗花を疑うのは止そうと思った。彼女は妊娠するわけがない、そんな出会いなどあり得ない。帰りが遅いからと言って、娘を疑うのは止そう、そう思うと気持ちが悪くなった。

明日の準備の米まで研いってしまったも紗花は出てこない、ソートとお風呂を覗くと、彼女はいい、いつの間に風呂から出たのだろう。

「ごはんは」と彼女の部屋の前で声を掛けた。

「うん、友達と食べてきたから、腹減っていない」
それならそうと言ってくれればいいものを、何と

いうことか、今まで待っていて損をした。彼女の部屋の前から去りがたく、傍にあった帽子を持つたりしてウロウロしていた。

突然、ドアが開いた。

「なんか用」

紗花も、母親の動きを気にしていたのだ。

「一緒に食べようと、待っていたの、だから」

「それはゴメン、でもいらぬ、食べたくない」

「そう、じゃ、弁当出して洗うから」

「いいよ、自分でやるから。お母さんは自分のことをやんなさいよ」

「でも、食べなければ、明日がづらいよ、それで、弁当も出して、」

「後で自分でやるからさ」紗花らしくない、剣のある言葉だ。やはりなんか悩みを抱えている。

そう、と言ってとつつきの彼女の部屋の前から離れた。だが、弁当を隠す彼女に不愉快な気持ちが生じた。

紗花は、いつもの紗花ではない、部屋に鍵がかかっていた。こんなこと今までなかった。

「浩平が帰ってくる前に話したいことがあるのだけど、入ってもいい」

「イヤ、入らないで、疲れたから、寝る」
「わかった、そうしなさい。なんか心配事があるなら、お母さんに相談しなさいね」

中から返事がない。気の強い彼女の雰囲気伝わってこない、さてどうしたものかと、祐希は、またキッチンに立ってうろろしていた。

その間に、中学生の浩平が帰ってきた、もうこの気持ちには棚上げだ。明日になれば、なんか取り越し苦労だと思えるに違いない。紗花が言う通り、運動会で疲れたのだろう、今の運動会は全校生徒の創作ダンスまで取り入れ、踊るから、結構ハードだ。創作企画者の中に紗花が入っている。もともと音感がいいから、その仲間の中でも苦労しないだろう。ダンスだけでなく、走る方も早い。

紗花は、中学の時からテニスをやってきて得意だ、言うなれば、スポーツ系の大学に勧められる。そうかといってスポーツ選手にはなれない個人の競技ではなんのタイトルもない、バトミントンの部活がせいぜいのところだ。すべて趣味の範疇であるう。それよりも普通学部の大学受験に向かって欲しい。わき道にそれている暇などないはずだ。

K高校は、県下が人口の急増で入学者が急増した

時、県立高を二十校増設し開校した企画であるから、歴史は浅く、紗花が入学した時は、まだ十年という短かさであった。

その当時の高校の様子を知っている人に訊くと、どの部活も中途半端で、県下では下から数えた方が早かった。小田急線沿いには文武両道で名を成す高校があるので歴史のないK高校は、名前を出したことがない、中以下の標準値では、致し方ないだろう。

それでも仲間意識はよく、男女共学の中で育まれていった。その中に、紗花は属していたバトミントン部で前衛を務めていた。二年生だから正選手ではないが、背が高い分実力は買われていた。フットワークよりも腕、肩が強く力があり、サーブの良さが評価されて、三年生になれば、正選手になれるかもしれないと期待していた。母親のピアノの腕の力と同じ腕力が影響するのだ。小さい時からピアノのお稽古は続けているのでそれが効を奏したのかもしれない、今でも時々バイエルを弾いている。

本来は、母親と同じ音楽科に進むようにと、中学校に入る前に相談したが、紗花は、一人でやるピアノ程度ならいいが、どこかのコンクールに出るような選ばれたピアノ弾きにはなりたくない、と言って

音楽系に進むことをあきらめた。

「お母さんは、自分が果たせられなかったものを私にかぶせるのでしよう」と、ずばり突かれた。確かに母親の祐希も、子どもの頃にピアノを習っていて、父親の失業で頓挫した経験の持ち主である。そのぐらい、ピアノのレッスンは、豊かな経済性と家族の支え、本人の意気込み、三拍子が揃わなければ、秀でた人を育てることができない、それも、十年単位である。それ故ピアノに秀でた子供を育てるには、両親特に母親の根性がなければ続かない。

普通の生徒でいたいと望んだ紗花は、高校の部活をバトミントンクラブに入る、という選定は、親にも相談せずに決めていく。祐希も彼女に相談されてももう高校では遅い。英才教育は無理であつて、何のクラブでもいいとした。紗花を平凡な女性として見守ろうと、祐希は思つて高校も中程度の県立を選んでくれた進学指導の先生の方向通りに決めた。この高校なら、私立高校のすべり止めは必要ないといふので県立一本で進んできた。それでも大学までは進んでほしいと願っている。

しかし、紗花が二年生の頃、家庭内は娘のことを考えるよりも、両親の中はもめていた。章一が推薦

退職の中に入ってしまった。こうなると、祐希のピアノは役に立つ、本式に生徒を取らなければ子どもの教育が出来ない、長女は県立に入っていたからいいが、長男の方は、私立でなければ、その先の大学受験が無理になるかもしれないという選択の渦中に入っていた。

その晩、祐希は、なぜ、夫の章一と別居したのか、思い出したくもない傷口を、たどつていた。この時期、バブルで、発展していた企業が引き締め策、職員の整理をするようになった、言うなればバブルの崩壊である。

章一は、五五歳で地元のH製作所を勧奨退職の機に、もうこの東京都下の市に在る必要もなく、故郷の茨城に帰つて、実家の農業を継ぎたいと言つた。

祐希は、章一が故郷に帰るといふ方針に耐えられなかった。ついでに章一はマンションも売り払つて、こちらに資産を残さないと、決めていた。子どもたちは、自分たちが、父母のどちらかを選ぶまで祐希の傍で育てることにした。もちろん子供たちは大学に入るのにも、この東京都下の市よりも祐希の生家のある湘南地方に移ることにした。都市化した小田

急沿線の生活の方が便利だと思って、そこで広い借家を探した。借家の賃貸料と子供の教育費は、章一に委ねて別居を成立させた。生活費は祐希のピアノ個人レッスンで賄えると計算した。祐希は長年細々とピアノを続けてきた夢が果たせる。章一に従って茨城の田舎、大きな家に棲む必要はないと考えた。章一は不自由だろうが、子どもの教育のためと夫は承諾した。彼が選んだ生活、田舎に行けばそれなりの親類縁者も多く地域ネットワークもあるので不自由しないだろうと、祐希は安心して別居に踏み切った。

さらに祐希は、章一に月一回程度、子どもがいる借家に帰って来てほしいと頼んでいる。いつ減らされるか分からないが、四季折々には帰ってくるだろうと信じて始まった、別居生活である。

その分高校生と中学生二人の子供の面倒を一人で見る必要がある。これは簡単ではない、何分一番父親のエネルギーが必要な時期なのに、夫は、子どもは妻に預けて、マイペースで地方の会社に再就職してのんびりしている。

(11)

都の郊外のマンションから賃貸住宅に引っ越した生活も四か月、やっと安定してきたかなと思った矢先の紗花の生理の遅れである。

次の朝、紗香の部屋側の廊下の窓を開けようと、祐希が窓際に立つと彼女が内側から「開けないで」と強い声で止められた。どうしたというのか、彼女がベッドの中で泣いていることに気付いた。娘との対立は結構慣れているので、彼女が口を開くまで待っていた。

六畳の部屋はベッドと机二つ、椅子、そして本棚、整理ダンスだけで一杯だ。一間の押入れがあるが、足元にも小物入れがところ狭しと置いてある、隙間のない部屋、テレビと鏡台が場所を取っている。思春期の女の部屋らしい。こんなにちまちまと物が置いてあつては、窮屈だろうと改めて思った。

「お母さん、怒らないでね、生理がないの」

「体育祭のせい」

「はじめはそうかしらと思っただけど、友達勧めで、妊娠キットで今朝試したの、妊娠してしまった」

「それは大変だ。結果論ではだめだからね、妊娠するようなことをしているの」

「……………」

「さてさて、妊娠は独りではできない。相手を聞いてもいい」

「それは言えない」

「そうか、言えないというのは、相手の立場があるのね、その男のことは、絶対に明かせないとすると、妊娠したことも言えないね」

「……」紗花は次から次へと涙をこぼす。

「お父さんみたいに、結婚している人」

いやいやするように首を振った。

祐希だつて首を振りたい。絶望感が体を揺らす。でもここで娘と一緒に泣いていたのでは、明日がない。

「相手ははっきりしているけど、その人には言えないのね、本当に」

「言えない、先輩。好きだった、今は大学生」

「大学の名前は聞かないけど、好かれてセックスしたの」

「いまは、それほどでもない」

「じゃ、彼とは初めてではないのね」

「うん、今回で二度目。前は、彼が卒業して、大阪に行くときに、記念と言って。その時は本を読んで妊娠しないように、生理のすぐ後にした」

「そう、今回は、生理との関係は気にしなかったの」
「そう、半年ぶりだから。生理の前には間違いないのだが、どっかで生理の周期が狂ったのかな」

「いろんなことがあったから、ここへ引越したころでしようか」

「うん、家に連れてきた日に、丁度誰もいなかったし、お母さんはピアノ教えに行っていた」

「知らなかった。その人に絶対に言えないのね」

「言えない、妊娠しない時だと言ってしまった」

「大学生ってどのの」

「大阪、しか言えない」

「それじゃ、親になつてとは言えないね。どうする」

「産めない、私だつて産めない、高校生だもの。私も大学に行きたいし」

「よし、分かった。中絶しましょう」

「……………」

「お母さんが出産したところに連れて行く。中絶は一日でも早い方がいい、考えている間がない。お母さんに相談してくれてよかった」

「お母さん、ごめんね。ごめんさい」

「お母さんは相談してもらってよかった。産むなんて言われたらどうしようかと思った。大丈夫、生理

が遅れた程度なら手術は楽だから」

「お母さん、本当にごめんね」

「彼に言つてはダメだからね、あなたが選んだのだからきつといい人なんでしょうが、でも、妊娠したと言われても大人になつていない男性は困るし、責任取らないでしょうし、逃げるでしょう。まして出産するとなると、父親の役割は大きい。妊娠と出産は別に考えなければならぬ。解るよね、出産は子供がそこに存在するのだから、責任もつて育てなければいけない。生を受けた子供は、一人の人間として生きる権利を持つ。生きなければならぬ人生を与えられる。自分のこととして考えなさい、あなたが育つためには両親がいる、その両親には社会があるし環境もある。安全で安心な環境が、これが結婚でしようね、それが保証されなければ子供を産んではいけない、オセンチな同情心で産んでしまつては、子どもには最も迷惑な話なの。なんで無責任に生んでくれたのだと、人格を持つ前に荒波に放り出されたような環境に子供は泣く。いい子供が育つわけがない。これは、産み出す行為をした女性の責任でもある。たったの一回のセックスでそこまで考える人はいない、だからできてしまったと言われても男は

責任を取らない。産んだ方は自分が生んだ子だから責任があるし、それを全うするには、将来の設計をしないおさなければならぬ。家族的な問題だけでなく、経済的な問題も大きいし、社会的にも受け入れられる必要がある」

「たいへんなことなのね」紗花は、どこまで理解したか分からないが、泣き声で言った。

「そこまで考えなければならぬ、十代妊娠は怖い、このことを紗花にきちんと教えておかなかつたお母さんが甘かつた」

「たつた一回で妊娠するとは思わなかつたもの」

「現実には厳しい。生理があるということは、排卵しているという証なのよ」

「……………」

「子供は女性、母親の体内で育つのですが、女一人でつくつたわけではない、男の存在があつて受精した、じゃ、彼の意見を聞かなければいけないのじゃないかという理屈はない。結婚していかない女性の妊娠は、自分で継続するかどうか、判断でき、おろすこともできる。ただし未成年であれば保護者の付き添えが、手術する医師の方から求められる」

紗花は急に不安になつてきたのか話に乗り始めた。

「でも、この子の父親は誰だということを言わなくても手術してくれるのかしら、彼の許可も取らずに中絶していいのでしょうか」

紗花も不安になってきたのか男の心配をする。

「あなたの体の一部なのよ、未だ人格はないの、あなたが判断するの。育てられる、育てることできる。出来ないでしょう、彼と結婚していかないのよ」

「……………」

「例えば、弟のことで考えてごらん、弟が誰か、未成年の人とセックスして、その結果、妊娠してしまったださい、と言われてたら、どうします。僕は勝手にやったのではない、僕は避妊しました。そうすると僕には責任はない、だから、墮ろしてください、というでしょうね。僕の子だと言われても困る、というでしょうね」

紗花は黙って聞いている。

「どう懲りた、結婚していない、二人の関係の中ではセックスをしない、と決めて付き合う。どうしてもしなかったら、絶対に妊娠しない方法を確実に取ることだね。」

「……………」

「お母さんが、紗花に教えなかったのがいけなかった、大きな失態だね。また、恋愛していたことや、そんな人がいたことも、気づかなかった。知っていれば、しつかりセックス論をしなくちゃ、いけなかったのよね、お父さんとの別居でめちやくちや、心が乱れていて、子どものことは二の次になっていた、ごめんなさいね」

「お母さんのせいではない、友達は、みな恋人とできてくるから、どう避妊すればいいのかと話している」

「そう、そんなに簡単なの、どこでセックスするの」「いろいろ、男性の家が多いかな。公園でも、夏など、結構いるよ」

「お母さんの頃は、処女で結婚したけどね、今はそんなに簡単に付き合っちゃうのか」

「恋人ができれば、大体セックスするけど、射精はさせない、怖いもの。子どもは生みたくない、当然のことよね、だから私みたいなへまは最低だった。家でやったのがいけなかったのだ」

「好きな人とやるのは、いけないじゃないけど。でも、もっと大人になってからでいいのではないかな」

「大人で、両方とも合意ならいい」紗花は確認する。

「女性として、したいと思うならしてもいいけど、そして、その結果には責任を持つ。妊娠してはいけない、妊娠は結婚することが前提である。親になる決意がなければいい方がいい、後戻りはできない」「そうだね、妊娠は、そこに子供ができる、親になることを自覚する、しなければいけない」

「うまれた子供も、被害者になる。男は父親になりたくないというからね。女も母親になりたくない。人生、まだまだやりたいことが一杯あるのというのに、急に母親になるんだから、怖い話よ。でも日本だからまだいいのよ、日本は妊娠の継続を止めさせる手立てがある」

「どうして」

「日本は産婦人科協会の元、優生保護法による人工中絶は適法である、から。人工中絶を禁じている国の未成年者の妊娠は怖い。例えば十三歳で妊娠してしまったらどうするのですか、子どもを産んで、どこかの施設で育ててもらおう、これは福祉的でいいけど、じゃ、生まれた子供の心はどうだろうか、自分を見捨てられたと思うでしょう、昔の捨て子のように貧しいからとか、国を追われたというような、万

難を排して生き延びなければならぬというなら別だが、父親が誰だか分からないから、捨てられたということを知ってしまったら、必ず、母親を恨むでしょう、そして社会的に生まれたときから、不埒なセックスのおかげで受胎して産みたくもないのに、生まれたという不遇な出会いの結果の誕生では、生まれた子供はいたたまれないほど傷つくでしょう、その子に責任はないのに、生まれたことがネガティブな結果になって生きてゆくことがつらいでしょう」

生まれた子にネガティブなレッテルを張るならば、産んでほしくなかった、という痛手を背負って生きてゆくことはつらいでしょう、世の中の子供は、誕生を目度いと言ってこの世に迎えられないならば、生きづらく、産んだ人を恨んで生きることになる。

よく罪を犯した子の言い分を聞くと、自分は歓迎されて生まれてこなかった。「産まれなければよかった」という元に母親に育てられたと言いう、その言葉の痛さはどんなものか、計り知れないものであるかと、想像する。

「そんな気持ちでの出産であれば、お母さんは生まれない手段を取って欲しいと思うのだが」と言つて祐希は締めた。

その後、紗花は、この三日間、ほとんど祐希には声を掛けない、かたくなに黙って自分の部屋に籠ってしまつて出てこない。

さて、紗花の受診は、来週までが限度だ。それ以降では十三週になつてしまふ、なんとしても十四週で止めたい。

その前に祐希は、懇意にしている医師に相談しなければならぬ、久しく産婦人科のドアをくぐつていないので、祐希の方がいじけてしまふ。自分がやろうとしていることの罪を感じてしまふ、その上章一にも相談せずに片づけてしまおうとさえ思つている。きつと章一に相談すれば、二人の意見を聞いた方がいゝというに違ひない。しかし、紗花の相手の男に、妊娠したことを教え、意見を聞いても、どうしようもないことだ、彼にとつては紗花が妊娠したことゝの責任は負いかねるであらう、きつと自分は十分に避妊したと言ひ張るに違ひない、大学生である彼は、紗花に慕われているから、成り行きで抱いてしまつただけで、罪の意識を持つほど、人生に通じているとは思えない。彼は今大学二年生であるから、きつと逃げるであらう。そんな人と、体を合わせて

しまつた紗花の未防備さを嘆く。もう二度とこのよ
うな経験をさせたくない。だからここで一気に、い
うなれば眠っているうちに中絶をしてしまいたい。
それも一日でも早く、胎児が育たない、未だ着床し
ない前に、処理せざるを得ない。十代の娘の妊娠を
防げなかつた母親の責任だと、祐希は自分一人の胸
に収めてしまおうと思つている。

(三)

ここまでたどつてきて、祐希は、自然に紗花の妊
娠を受け入れていた。大事ではあるが、母親の落ち
度として、対策を練らなければならぬと覚悟した。
この経路は、何らかの本で読んだのだろうか、母親
が本気にならなければ、紗花の人生に汚点を付けて
しまふ。是が非でも中絶のできる医師を探さなけれ
ばならない、一日でも早い方がいい。そして誰にも
言わずに事を成し遂げなければならぬ。紗花が、
相手の男に言つてしまえば、ことは複雑になる。紗
花を今、母親にすることはできない。大学に行かせ
ることが祐希の最重要な課題である。人生を歩んで
いないのに狭い一時の感情で、一六歳半ばの彼女を

母親にするわけにはいかない。祐希の勇氣ある判断を敷いて、彼女をその気にさせなければならぬ。母になることはロマンチックなものではない、長い人生の中で一番責任のある決意である。幸いに法律の中で、人工妊娠中絶が認められているから、日本は生きやすい国であると言える、と祐希は思っている。

紗花の人生を考えればここで厳しい決断をしなければならぬ、彼女が失うものが最小であつて欲しいと念じていた。

祐希は、テーブルに付いたまま、目の前のご飯を食べる訳でもなく考えこんでいた。まだ十月なのに、テーブルの上の味噌汁は冷めていた。考えている間に、テーブルの上に陽が射してきた。こんなことしてはられない、今日は、ピアノのレッスンの日だ。四十歳の女性と小学生の女の子二人に約束している。彼らは市内の子で、週三回通つてきている。

祐希が教えている子供や主婦たちは、趣味として習いたいという対象者なので気楽でいい、確かに、家の中にピアノがあつて誰かが弾いている、という生活は明るくていい。そんな人向きの生活住宅がこれからも求められるであろう。ピアノを持つている

家庭も多くなり、主婦がピアノに楽しむという地域が多くなると思つている。生活の中でピアノを弾ける環境を、借家のオーナーは考えなければいけない。多様なニーズにマッチングする、今風の文化的な賃貸住宅が理想だと、思つている。その夢を実現するためにも、この湘南地方の生活を手に入れたのだ。そんな家が見つかつて引越してきてよかった。しかし、家において、小遣い稼げると、うれしい悲鳴をあげたとたん、何の因果かピアノに関係ない苦勞が無い込んでしまつた。

「医者に行こう」と紗花の眼を見て言つた。

「お母さんは、何にも訊かない、いや訊けない。だから言いたいことがあつたら、紗花の方から言つて」黙つて、下を向いていた彼女は、涙を落した。苦しんだ結果であろう、高校一年生の秋では、本人の言葉は出ないのではなからうか。母親として許せない、という言葉が喉までこみあげていたが、だからと言つて彼女を追い込んで、言い訳を聞いても何にもならない。結果歩きで、この状態から、一日も早く脱しなければならぬ。その上で、心が平靜になつた時に相手があることだから、訊けばいい。今は、

女であることが宿命であつて、体内に入っているものを出すことを考えるだけだ。異物を、間違つて飲み込んでしまったと思えばいいのだ。どこから、誰からなどは関係ない、その経過を聞いても、また相手が誰であろうとも、そんなことは関係ない、安全に、一日も早く、眠っているうちに取り出してもらうことだ、何分、紗花は十六歳と二か月である。人生のスタートラインに立つたばかりで、一人で歩んでいくこともできない、一人で決めることもできない、一人で生きてゆくこともできない彼女が、さらに命のある子を持つことは不可能である。その決断は、母親が一番知つている。この成り行きは毎日一緒にいる母親の責任であると、祐希は、週末の手術を約束していた。娘の判断には、左右されない、という責任感の元に決断した。

(四)

「今日は土曜日、医者に行こうね」

「はい」

「泣いていたのでは、何にも解決しない」

「診療所は、お母さんが、あなたの帝王切開も浩平

の出産も全部やつてもらつて、更年期にも世話になつてゐる。腕のいい先生、保証付きだ。長年付き合つてきた先生だから安心して相談に乗つてもらつた。その先生に会つて、決めてもらいなさい。お母さんの決心は先生に言つてありますから」

「わかつた。お母さん、ごめんね」

「いい、謝らなくても、大人になつて、結婚するときに謝つて頂戴。ともかくお腹の中にあるのは、未だ人ではないからね、受胎したことで粘膜が大きくなつてゐるのだから、未だ胎児ではないから、大丈夫よ、週が進めばやがて胎児になっていく。今週一番いいし、そしてお医者さんもそう言つてゐるからね」

「わかつた」

「じゃ、駅まで車を出すから、用意して」

「うん、」

紗花の背中を押すことができた。彼女の言い訳や、彼女の謝罪を聞いてもしようがない、ここは結果歩きで、済ましてから、彼女の言いたい言葉を聞こうと、祐希は決断していた。どんな申し開きがあろうとも一六歳の彼女の言い分で結果を伸ばすこともやめることもできない。中絶の実行は自分の責任でも

ある、と祐希は、思っている。

紗花は助手席に乗らず、後ろの席で黙っている。

祐希は、何を言っても、何を聞いても親子の距離は縮まることはないだろう、それを凌ぐ覚悟がなければ、医者に連れていけない。

そして、彼女の話しはその後だ。紗花が言いたいことは何でも聞こう、そして聞いて彼女を理解するか、しないかはその後だ、何もかもその後だと祐希は自分に言い聞かせて、車の中は黙って運転していた。

更年期を患ったときに受診したことのある倉田産婦人科医院は、十三年前のままで、入り口も古臭い引き戸、診療所は小田急の駅から十五分先の住宅街にあつた。先に予約していて、娘も食事を断っているので、三十分ほどして呼ばれた。

「一人で入ってください」

という窓口の対応で、祐希は、待合室に残った。その時のために持ってきた本を開いた。桐野夏生作家の「柔らかな頬」。数年前に直木賞作品を取った作品で、この作家は同世代のせいか、好きでほとんど読んでいる。最初に出た日本推理作家賞の作品「OUT」から惹かれている。紗花のことで悩んでいる

ときに「柔らかな頬」は丁度いい。内容は、母親が不倫中に娘が失踪するという、いまの自分の心境に似ている、紗花の心が掴めていないという不安感が、作中の母親と同調する。

紗花は、どんな処置を受けているだろう、大体は想像できる。腰椎麻酔だから意識はぼんやりしているが、医者 の 処置や動きは聴こえているだろう。痛みはないと言われているが、恥ずかしさはこの上なく味わっているに違いない。しかし、どんなことがあるうとも子宮の中に宿り始めた粘膜の固まりはしつかり取り出して欲しいと神に祈っていた。

一時間かからずにドアが開いて紗花が出てきた。麻酔のせいか視点がぼやけているようだ。彼女は廊下を挟んだ別室に導かれ、そこで麻酔が切れるまで、横になつているようにと看護師が手を取って連れて行く。

紗花はお母さん、と小さく叫んで振り返った。何を言おうとしたのか分からないが、「心配しないで」と聞こえた。

下を向いた無表情な顔に、泳いだ眼が潤んでいる。

「お母さん、入ってください」とドアを開けた看護

師から呼ばれた。

「そこに座ってくださいという。」大柄の六十代の倉田医師は、椅子を回して祐希に眼を向けた。

「きれいに取れましたから」とエコーを見ながら説明した。

「ありがとうございます」

「早いで、体には影響ないでしょう、本人は何にも言わなかったでしょうが、よく気が付きましたね、ご専門でも」

「いや、何となく元気がないし、ショーツが汚れた様子もなかったもので」

「それで、この場合は一日も早い方が、体は楽です、良かった、判断が早くて。これで娘さんとよく話をしてください、決して問い詰めないでください。彼女は、傷ついていますから」

「何がなんだか、混乱していると思います」

「相手の男性のことを好きだったようです、だから求められれば、一緒になりたかった」

医師が、相手の人を訊いてくれたとは思わなかった。自分がどう入ってゆくか、祐希は決心がつかないで、診療所に連れてきてしまった。

「そこまで聞いてくださったのですか」

「相手の男性は、と訊きましたら、大学生だと言ったので、大方解りました。とつても好きだったようです。メールで妊娠したみたいと言ったら『うそ』という返事が来て、泣いたと言っていました」

祐希は、先生に質問した。

「その方にも責任ありますよね。親として、どうしたらいいでしょうか」

「この問題は厄介です。彼を愛していたなら、そして合意でセックスしたならば、彼に会ってもどうしようもありませんね、これは世間では大方、男性に逃げられてしまいます、まして責任を、と言っても訊く耳はありません、訊いた彼は、一生、あなたの娘さんに会わないと思います。かえって逆になってしまいます。女性は自分の身体は自分で守らなければいけない、というのが僕の定説です。娘さんに言っておきました、二度と来ちゃいけないと、厳しく言いました。そして自分を大切にしないと」

「本当に、ありがとうございます。たすかりました」もう、来ちゃいけないと、言ってくれた医師の言葉、これこそ、説得力がある。

祐希は、助かったと思った。母親が言わなければならぬことを、倉田医師が言ってくれた。

「本当にありがとうございます。あの子は学校の先生になるのが夢なのです」

「そうですね、何になりたいのだと聞きましたら、先生になると、いい先生に教わったのでしょうか。これからです、大学を目指して勉強します、と言つてました」

「本当にありがとうございます。先生に頼んでよかったです。実は、東京にこのような手術専門の病院を、『妊娠SOS』で紹介されていましたが倉田先生でよかったです。私が教えなければならぬことを全部、訊きただしてくれまして、助かりました」

「娘さんは、大きな代償を払ったと言えますが、お母さんの現実路線で、しっかりと考えられる親子で、私も助かりました。手術で取り出したものは肉片で、形を成していません。本人にも見せましたが、全くの粘膜です。うちの方で専門の人に頼んで処分します。また本人の回復も正常です。再来月には生理があるでしょう、今回のことは一生忘れないと思いますが、その方がいいでしょう、もう二度と来ませんと言つて帰りましたから。安心下さい」

「本当ですか、助かりました。私も二度と、この苦しみは味わいたくありません、娘の人生がだめにな

るかと思いました。先生お世話様になりました」と言つて、祐希はふかぶかと頭を下げた。

診察室に二十分ぐらいいたのか、紗花が心配してこちらを見ている。

「ゴメン、先生と昔の話をしていたので。紗花もここで生まれたのよ。先生はよく覚えてくれていて、前置胎盤だったので帝王切開。お母さんのお腹に大きな傷跡があるでしょう、その傷跡をとりましようかと言つてくださったの、断りました、痛い思いはしたくありませんと言つて」

「帝王切開つて大変なのでしよう」

診療所の椅子に座つて、帝王切開の話になつてしまつた。

「痛いよりも、七か月目から、入院して、安静にさせられた。でも未熟児だったらどうしようとか、知恵遅れの子もだったら、どうしようとかかささんざん悩んだが、元気な子で良かった」

「それが私ですか」

「そうです。子供産むのつて出産の痛みよりも、子どもの五体満足かどうかの方がもつと気になる。指一本なくても、本当につらいからね。後は神頼みで

す。だから、丈夫な子でありますようにとそればかり願って出産を待つ」

「じゃ、お母さんは、その願いが叶って、浩平も私も五体満足だから、悪いことしなかったご褒美だね」
「そう、だね。でもお父さんとは別居したから。それで紗花たちに寂しい思いをさせたせいかと、苦しんだ」

「大丈夫よ。誰が悪いわけでもない、お父さんは田舎に引つ込みたかったのよ。大きな家があるのだから、私たちは、お母さんの実家のあるこの湘南地方で生活したい、そして大学を目指すからね」

「でも、お母さんは、紗花のことで悩んだ時、傍にお父さんがいないということは、家族として、難しいと思った、紗花が女性だから、早急に解決できたが、これが浩平であったなら、お母さんの手には負えなかったでしょうね、男の子は父親でなければ無理かもね、後二年、浩平のためにも笠間にも行かざるを得ないかもしれない」

「二年後ならば、この貸家で、私が独りでも生活できるよ、お母さんは行ったり来たりしたら、そうすれば。ここは出ない、ピアノを置いておく、絶対に必要だから」

「ありがとう、そうすれば、お母さんは、浩平を連れてお父さんの傍に行くわ」

「きつと、お母さんは、ここが一番だって言って、動かないのじゃないかな、何しろ大好きなピアノが弾けるし、教えて欲しいという生徒さんを見つけてしまったのですもの」

子どもはよく見ている、と祐希は思った。

「まあ、いいけど。当分家族三人だから仲良ししようね」

駅に向かって下るとロータリーに入る、すぐそこが駅だ。おしゃべりして喉が渴いた、それだけでない、緊張が取れて、疲れが残った。祐希は、娘を誘った。

「ちよつと喉が渴いた、コーヒー飲んでいこうよ」

「うん。でもいちいち干渉しないでね。信用して、私は二度と、こんな過ちはしません。もう懲りたから、誓います」

「もう、訊きません。結果が良ければ、途中などどうでもいいのよ」

「助かった。母子家庭の欠点、母との距離を縮めませんからね」

「了解、でも困ることがあった時には、経験の深い

母親を頼ってください」

「そうかしら、と」言つて紗花は母親から少し遅れた、五歩も歩けば一緒になる距離を縮めた。もう少しで駅に着く。

駅の角に、どこにでもある、コーヒーショップが空いている。誰もいない店に座った。

「お母さんとコーヒー飲むのは、ひさしぶりね」

「そう言えば、うちでもコーヒー沸かさなくなつたじゃない」

「お父さんがいないから、お父さんはよく一人で飲んでいたよね」

「そう、だったわね。お父さん、今頃何しているかしらね、今度の事お父さんに言わないでね、お父さん怖い」

「本当は、話すのでしようが、でも今回は済んでしまったのだからいいとしましようね、女だけの秘密」

「うん、そうして。お父さんに知れたらどのぐらい怒られるか分からない。怖いよ、家出するようだよ」

「家出されたら困るわ。高校も辞めるようよ。そうしたら、紗花の未来ないね」

「十代のお母さんって、どんなかしらね、子ども育てられるかしら」紗花がしみじみ言った。

「怖いもの知らずよ、子どもは人形ではない、三歳になれば自我が出てくる。親は、根性比べ、どのぐらい我慢ができるかよ。そうでもしなければ、ちゃんと育たない」

「えー、我慢するのだ」

「当たり前でしよう、可愛い時ばかりではない。泣くわ、言う事聞かないわの連続」

「本当、可愛いだけなのかと思つた」

「バカみたい。そうね、モデル家があります、うちから五軒目の家、その家の姉妹は二人とも十代結婚ですつてよ。みんな知つていることだから言うけど、お母さんが十代で結婚して、三十歳で離婚したのですつて」

「どうしてでしようか、」

「早婚でもいい、でもその子ども達も親を見習うように妊娠して結婚する。これは一つの例ですけどお母さんは、早婚はあまり好きでない。しっかり勉強して、職業人になつてから結婚してほしいな」

この言葉を言いたくて、倉田医院から、ずっと歩いてきた。歩く道は、桜並木通りで、今は紅葉していて、歩道に落葉が沢山落ちてゐる。風情があるだけでなく、陽が温かい。一キロぐらい歩いたろうか、

桜紅葉を、親子で歩いたのは思い出になるだろう。

俵万智のサラダ記念日になぞらえて、「紗花が大人になった記念日」と、無意識に言葉が祐希の口に登った。

(五)

その日、紗花は自宅で、通ってきた二人にピアノを教えた。三時の人は元公務員で、六二歳の三島美さん、結婚の時期を逃したという言葉通り地味である。

「こんな家の傍で、ピアノが習えるのは、本当によい。それも高校の先生とか、言う人でなく、主婦をしながら教えるという先生は、親しみがあっていい。下手でも怒られない先生に会える、と思うと何よりです。『エリーゼのために』が弾けるようになるまで教えてください」という一般市民タイプの生徒だ。ピアノにあこがれ、それでいて両手で弾けない人はたくさんいる、その代表選手のようなものだ。いつか、ピアノを弾く自分に憧れている人が地域には多い、と祐希は知った。祐希は、音大は出ていないが、長年ピアノを習ってきているので、中等科の

ピアノ指導者の資格を取っている。

祐希は、ピアノは音楽に秀でた人ばかりが弾くものではない、普通の家に一台、家具と同じように置いてある生活。「駅ピアノ」が日本でも流行っているように、誰でも弾けるようになる、そのことを力説して教えている。だから、家の居間にピアノがあつて歌を唄うように毎日弾くことが大切だと考えている。

小学五年生の男の子、田淵真一さんは将来国立大学に入りたいので、受験のためにピアノを習わせたいと知人の母親から頼まれた。試験の中にピアノの課題がある大学で、唱歌の伴奏が弾ければいいという。学校でも必須科目で教えているが、なかなか身に付かないので個人の教室で練習し、高校に入るまでに「バイエル」を習得したいと望んでいる。

二人とも通い慣れているので、面倒なことはない。明美さん、退職後の人生設計だから、将来生活のプログラムの一つに出来ればいいと言っている。

「今日は、バイエル七十番までやります」と先週言ったとおりにきちんと練習してくる。ピアノのある生活をしたかったのが夢で、両手で引ければ、こんなうれしいことはないというほどピアノにあこがれ

ていた。

「よく出来ました」と褒めると真一はうれしそうな顔をすする。ピアノのレッスンがうれいのかどうか、母親に催促されてきているのだろうか、祐希は、自分も息子を、育てているので楽しい、こんな少年に教えられるのかと思うと、自然に笑みがこぼれる。

ピアノをマンシオンから運んでよかったと思っっている。章一と別れるときには、ピアノを捨ててしまおうかと、もう弾くことはないと思っただが、こちらに運んできて、大家の大沢未知子の計らいで、生徒を取れるたことは何よりだ。長年ピアノを趣味にしてきたかいがある。その上、年頃の子供を持っていることも評価されたのだろう。

家主の大沢未知子の家にも、子どもたちが弾いていたピアノがある。国立大を目指した長女は、家庭教師を付けて習わした、という経験者である。大沢未知子の推薦があれば、これからもっと生徒が増えるだろうと思うと、賃貸住宅の縁で、地域の文化に貢献できると、祐希は誇らしかった。

別居してきてから、生活費は自分で持たなければならぬ、家賃と子供の教育費は、夫が振り込んでくれる。これで生活は十分だ。章一の方が別居で得

た自由さ、と半比例して、経済は苦しくなるだろう、でも彼が選んだ人生だ、故郷の土地で、新しい職場と地域の人たちとやり直したいのだ、その生き方を取ったのだから、ずいぶん人生飛んでいる。いや飛んでいるのは、祐希の方かもしれない、ピアノ教師の道を見つけ、収入のある生活を構築している。普通なら、別居に目くじら立てるのが普通であるのに、その別居を好んで自由を勝ち取ったと言えるのだ。祐希の方が現代的でたくましいのかもしれない。

八か月前、高校生の紗花と中学生の浩平を連れてマンシオンを出てきた。そして間取りの広い、三LDKの家に入居した。大家は大沢未知子である。

この家は、新築するときに、入居する人のオーダーで造ったという居室が三部屋ある二十坪の平屋である。オーダーを受けたときには、こんな広い家が、引き継がれるかという不安が持っていた。でも今の時世、賃貸住宅の需要は高いので、この家も二世帯の人には歓迎されるのではないかと、冒険方々チャレンジして二棟のみ造ったと言う。その甲斐があつて他の家よりも三万円高値だが、今まで空いたことがない。

四月に引っ越してきたとき、小さな花壇にはパン

ジーンが花盛りだった。大家の未知子は、貸家を引き渡す時には、新築と同じようにする。もちろん業者を入れるから、その点は、この家が三人目であつても新築と同じようにして、貸し出す。もう一つ、大事なことは、庭の手入れた、この方は未知子自身がやる。雑草は、一本も生やさない。後に来た人が安心して生活できるように、隣人との境の生け垣も植木屋に頼んでアカモチの木で人の丈に造つてある。ピアノを弾く人には出会わなかつたが、一軒家は、マンシヨンと違つてかなり防音装置ができてゐる。

(六)

「あ、大変だ」息子を起こさなければ、どうりで家の中が静かだと思つた。紗花を出してから、浩平は中学生だから、姉よりもワテンポ遅くなつても間に合うと思つて起こさなかつた。

「お母さん、今日は学校休みだよ、学園祭の代休だ」
「そうだったの、忘れていた」

「お母さん、お姉ちゃん、なんだか落ち込んでいるけど、どうしたの」と食事する浩平に尋ねられた。

「受験勉強ができなかつたみたい、それで落ち込んで

でいるようよ」

「たいへんだな、どこを狙つてゐるんだ」

「うーん、まだ決めていないけど、職業人として生きていきたいみたい。だから経営学部に入ろうとしている」

「どんな、だろう」

「一般事務ではないみたい、お母さんは、公務員を勧めたいんだけど。都庁などどうかしらね、男女平等だと聞くから」

「お姉ちゃんが地方自治体へ。いいかも、社交的だし、なんでもかんでも平等が好きだから」

「そうね、身長は高いしね、スマートだし」

弟がそう思うなら、本物だろう、来年は高校三年になる、今ここで足踏みしてられない。

祐希はもう一つ宿題が残つてゐた。息子の性の相談である。中学三年生といへども、もう大人である、時々下履きが濡れて脱衣所にある。紗花の二の舞はしたくなかつた、まして男の性の欲求は娘以上にはげしいはずだ。さらに今は父親がいない、普通ならば父親と一緒に風呂に入りながら教えるものである。そのフオローをしなければならぬ。紗花の事件は丁度いいチャンスだ。

またちよつと浩平に声を掛けた。紗花が旅行に行っていて今晚は二人になることを浩平には教えていた。

「お姉ちゃん、付き合っていた恋人と別れたの」

「そんなことだと思っていた、聞かなくても大体想像できる」

「知っていたのね、深い付き合いをしたことも知っていたのね」

「家族としてか、紗花姉さんのことなんか、僕には関係ないよ。今、受験で忙しいのだから、余計なプレッシャーをかけないでくれ、お父さんに言えばいいだろう」

「もちろん、無責任なオヤジにも言うよ、でもあなたにしっかり伝え、浩平もこの機会に学んでほしいのだ」

「なんだよ、学ぶって」

彼はテレビを覗いていた眼と耳を祐希の方に向けた。浩平の頬に毛が薄く伸びている。髭が生える年頃になっている。バスケットの部活に熱中しているから、姉と会う時間などあまりない。帰ってくれば夕飯をむさぼるように食べ、風呂に入って、自分の部屋に籠ってしまふ。彼の部屋にはテレビがあるので、今

までは、テレビの勝ち抜き番組、Ｑ様頭脳バトル、全国大学王頭脳バトル、クイズ番組が好きで見ている。紗花の失恋のことがあつてから湿った空気が読めるのか、できるだけ居間にいないようにしている。

本来は、章一の方で引き取って学校へ通わせる予定だったが、母親の傍の方がいいと、茨城に行かなかった。確かにこれから高校へ行くには、この湘南の地域は恵まれている。選り取り見取りの公立、私立高校があるから自由に選べる。

「なんだよ、お姉ちゃんのことか」

「そう、紗花のこと、ボーイフレンドいること知らなかった」

「紗花姉のボーイフレンド、俺知っているよ。同じ中学だったから」

「そう、お母さんは知らなかった。家まで来たのですってね」

「うん、お姉ちゃんを送ってきたとき、偶然見た」

「いつの事」

「ここに入ってきたばかりの頃」

「その時、どうしたの」

「春休みだから、彼は、お姉に会ったんだろうと思つた、紗花も高校入学が決まっていたし」

「家にいたの」

「そう、この居間でお姉がなんか出していたよ」

「食事？」

「いや、クツキーかなんかではないかな」

「どうしてわかる、」

「だって、俺にも一緒にどうぞ、と言っていたもの。

俺が目指す高校の先輩だし、彼は今、大学二年生でしよう」

「そうね、大学生に物理を習ったというのは、彼からのことだったのね」

「そうかも、彼は、理系の大学だからね」

「それで、どうしたの、そのうちお姉が帰ってくるよ」

「じゃ、結果だけ言うね、彼とは別れた、失恋したの」

「なんだよ、そんなこと、俺関係ねえだろう」

「そう関係ねえよ」

「じゃ、黙っててくれよ」

「でも、お母さんはあえていうの、お父さんがいないから、本当はお父さんの役割だけど、お母さんはあえて浩平に言います。男と女はセックスすると妊娠するというのを」

「そんなこと知っているよ、避妊すればいいのだから」

「避妊を知っているなら、いうけど、どんな避妊でもダメ、特に男の避妊なんか役に立たない、コンドームも膈外射精も」

「そんなこと子どもに教える母親がいるのかよ」

「いる、ここにいる、お母さんは、いや紗花もだけ

ど、大きな失敗をしているの。彼がコンドームを使ったらいいのだけど、紗花は妊娠してしまった。」

「なぜなんだ」

「なぜなんでしようね。きっと、いや本当はコンドームを途中から付けた。これが回答よ」

「フーン」

「ここで言う事は、どんな避妊もダメ。正直、学生の知識では何としても妊娠する。妊娠は怖いのも、子どもが出来ちゃうんだから。育てられない子供を産んじやいけない、両方が、いや生まれた子供も不幸になる。解るよね」

「うん、わかる。じゃあ、紗花は子供をおろしたのか、痛かったらうな。あの学生に言ってるか」

「言わない。言ってもしょうがない」

「でも、紗花一人で痛い思いをしたのか」

「じゃ、浩平は、あんたの子供を妊娠しました、と聞いてどうする。謝るか、それとも中絶のお金を半分負担します、というかな、どっちだ」

「でも、子どもの責任は両方にあるだろう、彼が絶対に避妊したと言って裁判にでもなったらどうする、結局そのうちに中絶できない時期になってしまふ、中絶は早ければ早いほどいいのだから、生理が遅れて、二週間には、妊娠キットでわかるんだから、父親の責任問題ではないの、紗花も子どもを育てる能力などない、すっきりおろした方が早い、それはおかあさんの役割、しっかり相談してほしい」

「紗花姉ちゃん、痛かったろうな。かわいそうに」
「ここまで中学生の浩平に打ち明けたのはほかでもない、学生でいる貴方たちは、厳しいけど絶対にセックスはしないで欲しい。それを頼みたいから、あえて話すことにした」

「わかったよ、じゃ好きな女とは、キスだけにするよ」

「まったく、浩平ったら」
「紗花には絶対に言わないでね。彼女をこれ以上傷付けたくないから」

「うん、言わない。でも、彼にこの家の出入り禁止

した方がいいよ。彼に紗花を妊娠させてしまったこと、気づかせた方がいいと思うけど。男の責任あるでしょうよ、この家に来ればセックスできると思われたら、同じ過ち繰り返すことになる。絶対に入れないと紗花にも言わせる方がいい。しかし自分が知らないうちに相手の女性を妊娠させてしまったというのはどうかな、俺なら、どうだろうか。学生の立場では将来の自分を作るために結婚はできないし、責任取って父親になるわけにもいかない、外国なら、この男の役割、どうするんだろ」

浩平の言うとおりだ。セックスした男の責任を取ってくれと言われても、取れないし、人生を考えたら結婚の約束もできない。

「くわばら、くわばら」浩平は、意味もなく手を挙げて自分の部屋に入ってしまった。

中学二年生の彼に、恐ろしい現実を言ってしまった、と、祐希は反省した、彼はまだ男になれてはいない、これから男になるには、父親が必要だ、なんでもしやべれる父親、そして信頼できる父親が必要だと、改めて思った。

その二年後紗花は、県内の文学部教育人間科課程のミッション大学に合格した。ここの専門は教育で、中等科を目指す。紗花は中学の先生になりたかった。これは中学校時代に出会った先生に惹かれたからである。その折、先生から音楽の教科もと言われたが、彼女は音楽に拘る世界が嫌いだった。なんか良家の生徒でもある、そんな雰囲気が苦手だった。もつと酸も甘えも知ったような、庶民的な学部へ入りたかった。そこを出て、理数の先生になりたい、音楽よりも単純で客観的な理数がいいと思えた。

この方針は、未だ母親には話していない、母は、もつと大きな夢を、例えば民間会社に勤めさせて、会社員の妻にさせたいと願っているようだ。でも、紗花は、普通でいい、そして長く働きたい、自分の一番つらかった、妊娠という淵を、その経験を生かし、中学の教育に携わりたいと思うようになった。

十代妊娠を防ぎたい、と自分の経験を踏まえて思った、それは、性の体験をいち早くさせないということだ。今、法律では十六歳で結婚できるとしているが、二〇二二年からは、成人年齢で、男女ともに

十八歳になる。女性が十六歳から結婚できるというのは大きな問題である。体の成長で男女差を付けたと言われるが、十六歳の女性の体は、まだまだできていない、乳房も、腰回りも細い。さらに、中学卒なので勉強が十分できていない。何もかも基礎教育ばかりだ。高校へ行つて初めて学問という範疇に入つてゆくのだ。義務教育は終えたかもしれないが、人生を考えることもできていない、高校に入つて、初めて社会勉強をするので、まだまだ世の中の仕組み、社会を学んでいない。こんな状態では恐くて世のなかに出ていけない。

紗花が妊娠してしまったあの時は、母親の逸早い対応で、早期に対応することができた。そのお陰で何ら問題もなく高校を卒業することができた。

紗花は、将来中学の先生になるのが夢であったから、多くの知識と経験を詰め込むように努力した。本も読んだ、また友達とも語った、友達など高等学校の範疇とは大きく変わっている。全国にまたがって、女性だけでなく、男性とも付き合えた。

十六歳半ば、高校生の仲間だけしか知り合えていなかったなら狭く、小さな世界だったということを知った。そして思うことは、高校一年で妊娠し、子

どもを産んでいたならこの世界は得られない、都会の生活も、友人も得られなかった。そして職業を探すこともできなかった、学問をする時期に母親になつてしまったなら、どのぐらい不自由で、どのぐらい狭さの中に放り投げられてしまったか分からない。子どもの母という重大な役割を担わせられても、経済の保証もなく、社会を知らないまま生きてゆかなければならなかった。今思うと本当に恐ろしいことだったのだ。

妊娠と気づいた時に、傍に母親がいるかいないかは大きい。娘を育てる、母親の役割は毎月繰り返す生理の周期に敏感でなければいけない。生理に無頓着でいると、娘の生理の有無を見逃してしまう。妊娠という重要な現象を見失つて、二か月後には妊娠の継続期に入つてしまうという、判断の過酷な選択期を迎えざるを得ないのである。

紗花は自分の経験を通して目の前が開けたような気がした。多くの母親は、この難関を知つて娘を育てているのだらうか、娘の妊娠を経験しなければ知らずに過ぎてしまふに違いないと思つた。

浩平が、ある日、母親を捕まえて話しかけた。

「僕、お父さんの茨城に行つてもいいよ。お父さん寂しいのじゃないかな」と言い出した。これは、親の別居の成り行きを見ていた息子の大きな決心である。祐希は、息子がそんなことを考えていたとは夢にも思わなかった。二人の子を祐希が預かつたのは、決して母親のエゴではない、二人に進学の夢をかなえさせたかつたのだ。

牧島家族として、娘と母親だけの仲間意識は緻密すぎて、バランスを欠くのではないかとさえ思えた。そこに男の浩平がいれば、女性だけで固まり過ぎた結束力を緩和してくれると思つた。確かにその通り、このたびも、紗花と祐希は、固い絆で縛られたように、歩き方一つでも、またご飯の食べる時間も連絡を取り交わしている。どちらがリーダーなのかまでは分からないが、二人が親愛な契りを交わしているかのように、食事のお時でさえ、交流し合っている。それは二人だけが知つた秘密を守り通そうとする絆なのだろう。

「お父さん、一人で寂しいから、そつちに行くよ、

話し合ったときの時点に戻そうよ」

祐希は、浩平の言葉を聞いてびっくりした、この二か月、息子に寂しい思いをさせていたのだ。思春期の大切な時期に、息子が僻んでいることにも気づかず、後味の悪い思いをさせた、母親失格と言われ、でも訂正しようがない。

「ゴメン、お姉さんびいきに、気づきもしないで、悪かった」

「邪魔だったら、僕出て行くからね。お父さんだつて寂しいに違いない、僕の進学が有利になるようにと氣遣っているに違いない」

浩平の言うとおりで。章一は、毎日、子供の成長を待っているに違いない、男の子には父親という見方が必要だったのだ。

「お父さんは寂しいでしょうが、でも浩平が大学受験するのを健気に待っているから大丈夫よ」と祐希は言った。

浩平が、出かけた後、紗花が起きてきた。大学生の紗花にも祐希は食事と弁当を用意した。

「お母さん、行ってきます」とこちらにも何にもなかったかのように、バス停に走って行ってしまった。

「さあ、私も今日教えるところをしっかり習ってお

こう、指ならしが大切」

居間の隣の部屋に、ピアノが置いてある。一回り小さなピアノだけど、音程はしっかりしている。ピアノを家の中で弾ける住宅なんか、めつけものだ。窓を締めてしまえば、音が漏れない。レッスンの曲は「楽々シユアピアノ」「エリーゼのために」だ。

祐希は、マンシヨンからピアノを運んできてよかったと思っている。日中は、自分の練習ができる。決してピアノ家庭講師が目的ではない、二年後五年後先には地域の公民館活動でコーラスの伴奏をやりたいと思っている、そのためには練習には手を抜かない。

この貸家に来てからはその時間が取れる。マンシヨンにいるときには、部屋の並びが狭い建築なので、十分練習はできなかつた。大勢の生徒を取れるとまではいかないがせめて自宅で練習に励まなければ、腕は、いつの間にかすんと落ちてしまう。すると素人の個人レッスン迄響く。

別居の原因は、決して章一側の問題ばかりではない、子どもの進学のためでもない、祐希自身のピアノ弾くという夢を実現させるためでもあつたと、ピアノを弾きながら思った。

あとがき

妊娠するということは、人生の最大のドキュメントなのだ改めて思った。受胎したことを妊娠したと読んでも間違いないのだろう。受胎した胎児が継続することは、生命の倫理から言って当たり前のことではあるが、中には継続しがたい人もいる。例えば受胎する前の性行為、そのことが適切でなかったり、不自然であったり、または社会的に反する行為であったとしたなら、やむなくその胎児を亡き者にせざるを得ないだろう、その行為を人工妊娠中絶という施術で、墮胎するのである。

日本は「母体保護法」（平成二五年十一月十三日）の第一章第二条に「人口妊娠中絶とは、胎児が、母体外において、生命を継続することのできない時期に、人工的に、胎児及びその付属物を母体外に排出すること。」と定義されている。そして人工妊娠中絶は、母体保護法に順守して施行されなければならない。法律的には、母体保護法という法律に定められた適応条件（表）のある場合にのみ行い得ることで、この適応条件を守らなかった場合は母体保護法違反

になる。したがって、患者の求めに応じて行われるものではない。

一般に人工妊娠中絶は、危険度から言って妊娠一週までに行うことがのぞましい。そのため、望まない妊娠、継続できない妊娠については、早期の診断から妊娠に関する人すべての指導・カウンセリング、そして対処がとても重要となる。

学校においては、予定の月経が来ないなどの妊娠を疑うべき徴候を、生徒が自ら疑えるように、自分の身体の変化に気づくようにする教育と、そのことを親や教師に相談できる環境づくりが最も大切である。

受胎を喜べるか、または厭うかの境で人生が大きく変わる。最高の喜びと、最低の不幸せをもたらすという瀬戸際の判断を、一女性、年齢に関係なく任され、継続の不可を決めなければならない、最も重要な判断をせざるを得なければならない、とするも、でも大方は継続によって幸せになるが、フトした出会いで妊娠を続行出来ない場合は、その結果で不幸な人生を、または陰を背負うかどうかになる。

墮胎は法律で、認可されているが、国、宗教によつては禁じている国も多くある。

付帯事項

ここで、近々関係情報を書載せる。

神奈川新聞(二〇二二年二月二四日)の社会面から掲載する。

飲む中絶薬承認を申請 国内初、実用化へ
英製薬会社ラインファーマは二二日、妊娠を中絶するための経口薬の製造の承認を厚生労働省に申請した。承認されれば、飲む中絶薬は国内初めてとなる。安全性や有効性の審査を経て、早ければ一年以内に承認され、実用化する見通し。

国内での中絶は現在、手術に限られているが、中絶薬は欧米などで広く使われている。世界保健機関(WHO)は体への負担が少ない方法の一つとして推奨しており、承認されて利用できるようになれば、女性の負担が軽減される可能性がある。

〔中略〕

承認の場合、母体保護法としていされた医師が処方し、しばらくは医療機関の管理下で服用することが想定される。

参考文献

(産むか産まないか決める権利は女性の基本的人権であるという「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ(生と生殖に関する健康と権利)」は、一九九四年国連国際人口開発会議で提唱された概念である。そして二〇一六年には国連女性差別撤廃委員会は日本政府に配偶者の同意要件そのものの撤廃を日本政府に勧告している。